台大日本語文研究第 8 期
2005 年 6 月，頁 29-58
本文 2005. 4 30 收稿，2005. 6. 6 通過刊登

# 『民俗臺灣』之有形物——以民藝民具為中心——

陳 艷紅 *

## 摘 要

每當人們閱讀書籍或雜誌等文本時，其中呈現有形物的照片與圖繪總是吸引讀者的目光。『民俗臺灣』是臺灣在殖民地時代末期，頗受好評的綜合雜誌，照片與圖繪自是發揮相當大的效果。負責『民俗臺灣』照片版的松山虔三，負責圖繪的立石鐵臣，發行人金關丈夫以及負責編務的池田敏雄等人，堪稱爲建構『民俗臺灣』有形物的要角。換言之，金關丈夫的美意識，池田敏雄的庶民感覺，立石鐵臣的藝術觀察，以及松山虔三的寫實世界，妝點了『民俗臺灣』精采畫頁。

上述的照片與圖繪，以當時臺灣及南中國常民之衣食住有密接關係的民藝與民具爲主。所謂民藝，依『広辞苑』的解釋，「庶民生活中產生的鄉土的工藝。以實用性與素朴之美爲人所好。「民藝」一詞，係大正末期柳宗悅等人所造。」柳宗悅是當時日本民藝館館長，他於 1943 年 3 月受臺灣総督府之請，來台灣環島視察。任務是在時局緊迫的臺灣，希望重新肯定臺灣足以自給自足生活的材料。擔任導覽的是金關丈夫與立石鐵臣二人，金關丈夫且詳細紀錄旅行所見與感想。

本文之架構爲，雜誌中所呈現之立石鐵臣有關民藝、民具的版畫，松山虔三的照片與其他投稿者描寫民藝、民具的文章爲橫軸，日本民藝館館長柳宗悅訪臺期間的記載爲縱軸，透過專家專業角度肯定台灣既有用民藝之用與美，探討臺灣常民文化的生命力。

關鍵詞：松山虔三、立石鐵臣、柳宗悅、有形物

* 中央警察大學副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# Physical things of『FOLK CUSTOMS OF TAIWAN』
## — centering around ”folk arts and folk tools” —

Chen,Yen-hung *

## Absract

When getting the publication like books or magazines, we were always attracted by its photos、pictures and so on. Because of『FOLK CUSTOMS OF TAIWAN』 is one of the most popular all around magazines in the later of Japanese colonization period, so the photos and pictures had lots of fascination. All people built up the『FOLK CUSTOMS OF TAIWAN』 were Kenzo-Matsuyama by photos, Tetsuoumi-Tateishi by the pictures and Takeo-Kanazeki of the publisher. Also Toshio-Ikeda of the editor had built up the physical thing’s description. The photos and pictures were all folk arts or folk tools for civil at that time. They were always close to our daily life. What 「folk arts」is “come from our daily life, native arts. It also accompany utility and simplicity.” written in『KOJIEN』dictionary. Yanagi went around island Taiwan when he was a director of Japan folk arts. Finding out more material for self sufficiency in the tension situation in Taiwan is the only purpose for him. And the guidance just were Kanazeki and Tateishi.

This study tries to taking in Tateishi’s folk print but also Matsuyama’s graph picture as the beginning, the words contains from contributors as a horizontal and notes written by the director of Yanagi during in Taiwan travel term as a spindle. I hope can deal one page as to ordinary usage and beauty through the professor visual.

Key words: Kenzo-Matsuyama, Tetsuoumi-Tateishi, Soetsu-Yanagi, Physical things

* Associate Professor ,Central Police University

臺灣大學學術期刊資料庫

# 『民俗臺灣』にみる有形物——民藝民具を中心に——

陳 艷紅 *

## 要　旨

書籍や雑誌などの刊行物を手にしたとき、しばしば有形物を写した写真や、図絵は読者の目を引くものがある。『民俗臺灣』は台湾の植民地時代末期に、好評を得た総合的雑誌であっただけに、写真や、図絵の魅力が大きかったようである。『民俗臺灣』の写真版の担当は松山虔三をはじめ、図絵担当の立石鐵臣、そして雑誌の発行人としての金關丈夫及び実務編集の池田敏雄が『民俗臺灣』における有形物の描写を築き上げた方々である。

写真や図絵に収まった内容は、当時の常民の衣食住に密接する民藝や民具である。民芸とは、広辞苑によれば、「庶民の生活の中から生まれた、郷土的な工芸。実用性と素朴な美とが愛好される。」と書かれている。柳宗悦は 1943 年 3 月、台湾総督府の要請で台湾全島を一巡りをしたことがある。目的は時局が緊迫しつつある台湾において、自給自足の用品に資する材料を再発見しようとする任務であった。彼の案内役を務めた金關丈夫、立石鐵臣の二人であった。

本稿は雑誌にみる立石鐵臣の民藝、民具をめぐる版画と松山虔三のグラフ写真をはじめ、他の寄稿者による民藝、民具の文字描写を横軸とし、日本民藝館館長柳宗悦の訪台期間中の記載を縦軸とする試みである。専門家の目で台湾にあった在来の用と美を肯定してもらう一頁を論じたいと考える。

キーワード：松山虔三、立石鐵臣、柳宗悦、有形物

* 中央警察大学副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

# 『民俗臺灣』にみる有形物——民藝民具を中心に——

陳 艷紅

## 一、始めに

書籍や雑誌などの刊行物を手にしたとき、しばしば有形物を写した写真や、図絵は真っ先に読者の目を引くものがある。『民俗臺灣』は台湾の植民地時代末期に、好評を得た総合的雑誌であっただけに、写真や、図絵の魅力が大きかったようである。『民俗臺灣』の写真版の担当は松山虔三をはじめ、図絵担当の立石鐵臣、そして雑誌の発行人としての金關丈夫及び実務編集の池田敏雄が『民俗臺灣』における有形物の描写を築き上げた方々である。つまり、人類学者金關丈夫の美意識、民俗研究者池田敏雄の庶民感覚、立石鐵臣の芸術的なセンス、及び松山虔三の写実的にみる目が、『民俗臺灣』の鮮やかな一面を飾ったと言えよう。

なお、写真や図絵に収まった内容は、当時の常民の衣食住に密接する民藝や民具である。民芸とは、広辞苑（電子辞書）によれば、「庶民の生活の中から生まれた、郷土的な工芸。実用性と素朴な美とが愛好される。民藝というコトバは、大正末期柳宗悦らの造語。」と書かれている。柳宗悦は日本民藝館館長として 1942 年 3 月、台湾総督府の要請で台湾全島を一巡りをしたことがある。目的は時局が緊迫しつつある台湾において、自給自足の用品に資する材料を再発見しようとする任務であった。彼の案内役を務めた金關丈夫、立石鐵臣の二人であった。旅行中の所見、感想を詳細に記録した。

本稿は雑誌にみる立石鐵臣の民藝、民具をめぐる版画と松山虔三のグラフ写真をはじめ、他の寄稿者による民藝、民具の文字描写を横軸とし、日本民藝館館長柳宗悦の訪台期間中の記載を縦軸とする試みである。専門家の目で台湾にあった在来の用と美を肯定してもらう一頁を論じたいと考える。宗教信仰、慣習俗信など心意現象をめぐる有形物について触れないこととする。

臺灣大學學術期刊資料庫

## 二、『民俗臺灣』における有形物一覧

### （一）有形物——民藝・民具の編集について

『民俗臺灣』における有形物を次項のようにまとめた。表の作成について説明を加えたい。金關丈夫の文字説明及び松山虔三の写真で構成した「民藝解説」をはじめ、松山虔三の写真と簡単な文字説明の「グラフ写真」（ともに、頁数表示なし）、立石鐵臣担当の表紙と「臺灣民俗圖繪」が有形物の主軸となる。一方、寄稿者の有形物に関した描写は雑誌の所々に見られるので、これも一覧表に組み込んでみた。これら有形物の材質は、焼き物をはじめ、木材、金属、竹、布、草、ガラス、獣の皮などがあって、使用目的別は、建造物、小細工、家財道具、装身具、玩具、衣服などが見られる。

金關丈夫は骨董品に鑑賞の素養を有する人であった。「民藝解説」で紹介した「民藝品」は創刊号から順番に並べると、陶器、餅印、染付壷、染付鉢、士林刀、燭臺……となっている。３号までの解説は骨董品を鑑賞する嫌いがあると感じ取られている、という反響を呼んだようである。それに対して金關は４号の「亂彈」欄（時評欄）で読者に次のように呼応している。

> 民藝解説について
>
> 筆者の擔當している「民藝解説」が徒らに回顧的であり骨董品紹介であると云ふ攻撃を受ける。徒らに回顧的であり骨董遊びであるか否かは、號を逐ふて見ていただき度い。臺灣の批評家はどうも氣が早くて困る。一たい民藝の性質として歴史とか傳統を離れると非常に危險なものである。筆者が今後出來るだけ力を入れて紹介しやうと思つてゐる新製品の如きも過古の傳統にその美を負つてゐないものは一つもないのである。あるなら一つでもいいから示していただきたい。筆者は紹介の順序として先づ過去からは始めてゐるのに過ぎない。そしてこれは未だ當分つづける積りである。過古の正しき美を認識出來たら、さてそれから新製品に移つてもいいではないか。ただ不幸のして臺灣には竹製品等小數のもの以外に推賞に値する原産民藝品が

臺灣大學學術期刊資料庫

ないやうである。筆者はその品目の寡少を恐れてはゐる。然して筆者が臺灣を餘す所泣く知悉してゐるわけでもない讀者諸氏の報告によつて未知の美しい作品を知ることが出來たらこんな喜ばしい事はないと思ふ。批評家よ、骨董がお嫌ひならどうか筆者の知らない美しい新民藝品を教へてください。筆者がその價値を認めたら喜んで紹介しませう[1]。

一方、4 号の「民藝解説」の解説文の冒頭に、括弧した注釈が見られる。

（解説者の旅行の為めに用意の暇を欠き、本号もひきつづき南支の染付陶器を擇ばなければならなかつた。來月からは目先を變へるつもりである。）

この注釈の執筆者は写真を担当した松山虔三であったと考えられる。要するに、主役の金關が調査や旅行で不在のため、読者の要望に答えられないので、既定の原稿にし、その上、注釈を付するかたちで対応したと推定できよう。金關はその後、時評欄を通して上述のように反響に対して伝統民藝の正しい美を認識した上で新しい民藝の良さを紹介するつもりであるというメッセージをおくったと思われよう。

34 号「民藝解説」の解説の冒頭に括弧して注釈するところがある。『民俗臺灣』における「民藝解説」はどのようなものであるかについてここで検討してみる。34 号の「民藝解説」は立石鐵臣の代筆である。解説の前にこうした「前書き」が添えられている。

作品の選擇は例の如く金關丈夫氏だが、解説を忘れて南京に立たれた。それで私が間に合せることになつたが、氏が歸臺されてこの解説に不滿を感じられたら、氏の用意される解説を點心にでも出していたゞくつもりである[2]。

このように各号の民藝品写真は金關が選定し、解説を付け加えるという仕事の分担となった。

1 『民俗臺灣』4 号P33。
2 『民俗臺灣』34 号。

臺灣大學學術期刊資料庫

表の材料別から見ればわかるように、焼き物の占めるウェートが大きく、そして竹細工と木材のほうがそのあとを追う。金關丈夫は前述した通り、人類学者であり、考古学者でもある。氏にとって、過去の人間及び人間が残した活動の跡を発掘・研究することと、現在生きている人間に使われている器物を鑑賞・探究することとは同質であった。彼は考古学の専門的知識を以て民藝品を鑑賞することにより、文化の流れの奥ゆかしさを究明するというユニークな方法で自分の民俗学での研究を開花させた。金關の解説は、民藝に於ける文学・美術・科学の総合的表現の美しさを充分に表現している。

**（二）『民俗臺灣』における有形物を下記のようにまとめた**

| 号 | 民藝解説 | グラフ説明 | 民俗圖繪 | 表紙 | 文字内容の頁、題名、執筆者其他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 陶枕 | 城隍祭（松山図、金關文） | 打綿布 | 龍山寺 | 20 菅芒藁玩具(宮山智淵） |
| 2 | 餅印 | 赤山の天主会堂（松山図、金關文） | 飯店　大土山 | 厨房 | |
| 3 | 染付壷 | 甕夏日 3 題（松山図文） | 34　抽籤仔・燭店の工房 | 鐵店 | 36 菅芒藁玩具（宮山智淵） |
| 4 | 染付鉢 | | 26 篦店・香店工房 | 豚の昼寝 | |
| 5 | | | 斗柚　日食龍山寺 | 果物屋 | 22 敬惜字紙と聖蹟亭（黄得時） |
| 6 | 士林刀 | 新市庄平埔族部落（安武一夫圖　國分直一文） | | 藥店 | 23 内山銅鑼について(潘迺禎） |
| 7 | 燭臺 | 宜蘭で見た窗子と門戸（松山図） | 茶館的停仔腳揀茶 | 馬頭 | P18 春聯（田大熊）P21 布袋戯と人形（立石鐵臣）P34 拉青と八卦篩（呂赫若)P36 春と長杉(宮田弥太郎） |
| 8 | 箸籠 | 高砂族の穀倉（松山） | 豪華的庭園舶來的民家 | 柴屐 | P47 柴屐(立石鐵臣） |
| 9 | 綉花 | 祭吊（(松山 | 老歳仔冬姿 | 窓仔 | 2 打綿弓と飛錢（小 |

臺灣大學學術期刊資料庫

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 様 | 図池田文)) | 老歳仔閒談 | | 葉田淳）28 煉瓦窗看板（立石鐵臣） |
| 10 | 草鞋 | 竹細工の村（松山図、金關文） | 鹿港一<br>鹿港二 | ナンジャモンジャ花 | 7臺灣婦人の髪飾13支那鄉土玩具（中川正)24長杉楊氏千鶴37臺灣の煉瓦(蓮芽堂）43 貨幣と臺灣（黄南寛） |
| 11 | 手爐 | 臺南の風物（渡辺秀雄図） | 30赤崁樓洗濯物眺 | プロミンジャ城 | P12臺灣の家庭生活（長谷川美恵）44臺南の招牌(淵田五郎） 44臺南の民俗寫真（渡辺秀雄） |
| 12 | 薬壷 | 墓（松山図） | トウシヤ | 黄牛 | 10 臺北の雜居家屋25 臺灣の家庭生活（長谷川美恵） |
| 13 | 水缸仔と玻璃缸 | 臺南舊神學校附近（松山図） | 旗竿 | 扁の兔 | 2 臺灣の簿記數字（須藤利一） 25鮫靴と国民車（立石鐵臣） 45 服装解説新娘の禮服 （吉見まつよ） |
| 14 | 煙盒 | 鹿港（松山図文） | 鶯歌の製陶工房 | 井戸 | 5紙毬（和田格） |
| 15 | 染付中皿 | 出棺（金關図池田文） | 柴屐の仕事場にて | 玩具鬼 | |
| 16 | 花籃 | 花 | 停仔脚の小物賣り・挨粿 | 石榴 | 38 高砂族のキセル（茅野正名） |
| 17 | 木匙 | 海南島三亜港の蛋民（金關図） | | 宗教版画 | 12 紙毬瑣話（吉川幸次郎）30 フィリピン古樂器圖誌カルタング（吉村敏）25艋舺雜居生活(黄良銓)44鶯歌陶業聚落（編輯部） |
| 18 | 茶罐 | 廣東の竈祭り（松山図、宮本文） | | 竈 | 32 服装解説 禮服（吉見まつよ）46鎌刀製造工廠（小仲厚三） 47フィリピン古樂器圖誌スリバウ（吉村敏） |
| 19 | 竹椅 | | 竹の搖籃 | 婚禮用 | 2臺灣民家の型式に |

臺灣大學學術期刊資料庫

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 子 | | 圓仔湯 | 菓子紋様 | 就て22臺灣の凧(黄啓木)42服装解説晴着上衣　(吉見まつよ)45門聯つれづれ(黄連發) |
| 20 | 玻璃繪 | 鋪道(松山図文) | 被子・抽籤子 | 甲二馬 | 13 納鞋底(楊逵) 25 噴田蛤仔(和田漠) 40臺灣の將棋(倉田哲) 42服装解説男子禮服(吉見まつよ) |
| 21 | 染付鉢 | 黎族の土器作り(金關図文) | | 大王 | 24 服装解説幼兒の上着(吉見まつよ) 27 フィリピン古樂器圖誌　ルダツグネグエツト(吉村敏) |
| 22 | 穿瓦衫 | 櫻社三態(松山図文) | 平樂遊・煉瓦燒風景 | 天官 | 42 竹細工(顔水龍) |
| 23 | 香炉 | 燒金爐 | 萬華にて林本源の庭 | 竹椅子 | 2臺灣民藝に就いて(柳宗悦話、金關記)7斧と内腹石(阿部定) 雄12角細工(顔水龍) |
| 24 | 花仔布 | 二つの石柱 | 洗濯風景一洗濯風景二 | 敲刀 | 12 臺灣民藝に就いて(柳宗悦話、金關記)24フィリピン古樂器圖誌ガバツグ(吉村敏) 28 染房(顔水龍) |
| 25 | 燭臺 | 大龍峒の乞雨 | | 高砂族の織物紋様 | 17 フィリピン古樂器圖誌スウビング(吉村敏)25服装解説婦人の裙(吉見まつよ) |
| 26 | 椅子 | 月下美人 | 關廟庄にて一關廟庄にて二 | 竹笠用の木型 | 29香香(陳氏董霞) 37 フィリピン古樂器圖誌サフナイ(吉村敏) |
| 27 | 窗仔 | 水の植物 | 關廟庄にて三關廟庄にて四 | 牛車 | 2民藝論(工藤好美) 26筆屋の工房(顔水龍)40本島兒童の玩具(黄連發) 47扒龍船(吳氏嫦娥) |

臺灣大學學術典藏資料庫

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 印色盒仔 | 路地（松山図文） | 關廟庄にて五關廟庄にて六 | ピンポン | 30 本島婦人の服飾（黄氏鳳姿)42 服装解説本島婦人の褲（吉見まつよ） |
| 29 | 楹籃 | 臺南孔子廟樂器（松山図、西田文） | 大南社にて一 大南社にて二 | 高砂族の火薬入れ | |
| 30 | 椅子 | 林家舞台（松山図金關文） | | 高砂族の杵と臼 | |
| 31 | | | | 高砂族のチナオ、ハイニン | 38 服装解説服飾(吉見まつよ) |
| 32 | 硯 | 新しい村の建設（松山図文） | | 高砂族のタバコ入れ | 2 淡水河の民船（國分直一など） |
| 33 | 茶碗 | 濁水溪 | | 燭臺 | |
| 34 | 竹椅子（立石） | 高砂族の子供の背負方と授乳（松山図文） | | 竹椅子 | 32 東海岸の掠魚船（國分直一）33 臺灣の指環（宮山智淵） |
| 35 | | 水牛（松山） | | 裁縫道具 | 2 村の歴史と生活（上）（國分直一など） |
| 36 | | | | 波羅蜜 | 22 村の歴史と生活（下)(國分直一など) |
| 37 | | | | 木杓 | 1 土造家屋（國分直一など） |
| 38 | 籤筒 | 臺灣の新しい住宅様式（松山図文） | | 天狗 | 38 屋上の陶龍（呉槐） |
| 39 | 鏡箱仔 | リヨヘン（松山図文） | | 磨碗 | |
| 40 | 草履 | 下駄（松山） | | 綉花 | 12 覺書（潮地悦三郎 畫）17 越瓷浮圖新例（金關丈夫） |
| 41 | 筆筒 | 移民村の印象（松山） | | 綉花 | |
| 42 | 赤繪皿 | 水車（松山） | | パイワン族の織物 | 2 海邊民俗雜記（國分直一など） |
| 43 | | | | | 2 海邊民俗雜記（國分直一など） |

臺大博學術期刊資料庫

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 注 | 金關丈夫と松山虔三のコンビが主とする | | すべて立石鐵臣 | 立石鐵臣が主とする | |

上の表にみた有形物を項目別に調べた。一つの写真や図絵に二種以上の性質を有する場合、重複に記入する。

「グラフ」における有形物

| 材　料 | 号　別 | 計 | 注 |
|---|---|---|---|
| 建物地域風景 | 2、6、7、10、11、12、13、14、20、22、28、30、31、32、39、41、 | | |
| 民藝民具 | 3、6、8、10、21、23、29、40、42、 | | |
| 習俗 | 1、4、9、15、16、17、25、34、 | | |
| 動植鉱物 | 16、24、26、27、35、 | | |

「表紙」における有形物

| 材　料 | 号　別 | 計 | 注 |
|---|---|---|---|
| 建物地域風景 | 1、5、6、9、11、14、18、 | | |
| 民藝民具 | 2、3、7、8、15、17、19、20、21、22、23、24、25、26、27、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、 | | |
| 習俗 | | | |
| 動植鉱物 | 4、10、12、13、16、28、 | | |

「民俗圖繪」における有形物

| 材　料 | 号　別 | 計 | 注 |
|---|---|---|---|
| 建物地域風景 | 2、3、5、7、8、9、10、11、12、13、16、21、22、23、24、26、27、28、29、 | | |
| 民藝民具 | 1、3、4、14、15、16、19、20、26、27、28、29、 | | |
| 習俗 | 2、19、 | | |
| 動植鉱物 | 5、 | | |

臺灣大學學術期刊資料庫

「民藝解説」における有形物はすべて民藝民具に属するので、ここでその材質を調べた。

| 材　料 | 号　　別 | 計 | 注 |
|---|---|---|---|
| 焼き物 | 1、3、4、12、15、18、21、22、25、28、33、41、42、 | 13 | |
| 木材 | 2、17、26、38、39 | 5 | |
| 金属 | 6、7、26、7、23、 | 3 | 23 号の写真は渡辺毅 |
| 竹細工 | 8、14、16、19、30、34、 | 6 | 34 号は立石の代筆 |
| 布手芸 | 9、24 | 2 | |
| 草細工 | 10 | 1 | |
| ガラス | 13、20 | 2 | |
| 石 | 27、32 | 2 | |
| 皮 | 40 | 1 | タイの民芸品 |
| 竹と金属 | 11 | 1 | |

## 三、執筆者方々

### （一）金關丈夫と民藝解説

分類表に示している通り、「民藝解説」に取り上げられている民芸品の材料は焼き物を始め、木材、金属、竹細工、布手芸、草細工、ガラス、石、皮並びに竹と金属の結合体である。「民藝解説」における民藝の材質の多様性及び焼きものや竹細工、木材の占める割合が高いことから、金關の民藝品の取り扱い方がわかる。つまり、氏が関心を寄せていた民藝品は色々な材質のものに行きわっていることと、氏の焼きものに対するこだわり並びに台湾の特産である竹細工、木材への美的感覚や実用性を強調することが伺える。

創刊号の「陶枕」では、次の説明文が見られる。

> 臺灣人はこれを陶枕頭（フィチムタウ ）と云つてゐる。白地に謄礬の緑釉が流れた、所謂「交趾」系の陶枕である。胎土は明褐居ろ。産地は廣東附近と思はれる。火度のやゝ低いものは、釉が剥落したりして困るが、適宜に焼成されたものは、その肌

臺灣大學學術期刊資料庫

合がよく、皮脂の滲みこんで、所謂「味」の出たものは、ことに見事である。形も色も美しい。皮膚に冷たく、心に温いこの陶枕を、近頃流行の何々式と云ふ醜怪なインチキ物と比較すれば､自らそのよさが判るに違ひない｡觀賞用としての陶枕では、何と云つても上面の平たい、繪高麗様の宋の磁州窯などであらうが、實用には寧ろこの方が妙であらう。臺北などでは既に骨董品扱ひであるが、南支では今でも荒物屋に新品として鬻がれてゐる。また、この系統の陶枕の製作は沖縄にまで及んでゐる[3]。

金關は「陶枕」という民具の産地、作り方、特色釉、外観などについて、常民の暮らしの用と美を語り、人間の知恵から生まれた品物は現実生活と密着する必然性を強調するものである。創刊号に置かれるほどの重みから、氏の製陶に対する拘りが伺える。

6 号「士林刀」の解説は次の通りである。

臺灣の金屬製品では、士林刀も美しい。これは士林の名産であつたが、今は鋼鐵の配給制で一時製造が中止になつてゐる。その由來や、製法については、誰れかが本號に書かれることと思ふから略すが、臺灣で造られる他の刃物にくらべると士林刀は製作が格段に丁寧である。全體の形、ことにその幅と厚みとの關係が非常に氣持ちがよくて、刃を閉ぢてこれを掌に握ると、その感觸が實にいい。手に握つてゐるのが樂しいやうだる。柄の所には水牛の角を使用した台湾の製品の中では成功した唯一のものではないかと思ふ。ひかへ目に、光澤消しで、縞目などを顧みなかつた所に、この成功の秘訣があつたのだともふ。牛角が出しやばつたものには、見られるものはないやうである。

文献：臺灣總督府中央研究所工業部報告第一號（大正十一年）

村井八蔵「士林ナイフに就いて」[4]

「士林刀」については、有志の人に任せるつもりだったが、6 号は

3　『民俗臺灣』創刊号。
4　『民俗臺灣』6 号。

臺灣大學學術期刊資料庫

「士林特輯」と称されるので、氏は文献を参考にして、自ら執筆したと思われよう。この金属と牛角で出来た刃物は、美しくて便利であり、その上、地名を冠した民藝品であるので、特輯号のハナでもなったような重みがある。氏の愛用品であるだけに、人間と民藝品との間の触れ合い、そしてそれに現れた人間性が無言のうちに語られている。

19 号「竹椅子」の解説について、

> 臺灣本島民衆の必用品にして、竹を以つて解決されないものは殆どないと云つても過言ではない。從つて竹を處理する手法の巧妙さと、これに對する趣味の健全さは、中南支以外に殆どその比類を見ない。臺南關廟庄の如きは、その傳統を最もよく保存してゐる就中多量に必需される竹椅子の類はその手法、構造は最も合理的で、そして最も美しい。近年内地の眼識ある工藝家が、臺灣の竹工人を招聘して、内地人の新生活用具としての竹工藝を興したが、甚だ好評であつた。臺灣ではしかしそれ以上の製品が比較的安價に豐富に生産されてゐる。臺灣在住の内地人家庭に美しい竹の家具を取り入れて臺灣に於ける新生活様式を樹立することは、比較的容易であり、また楽しい課題の一つであらう。
>
> 若い世代の内地人は、先づこのあたりから臺灣生活の計に着手するのが適當ではあるまいか[5]。

ここで金關は台湾において竹細工の実用化を広めることは、台湾本島人の経済環境に有益だと同時に、内地人の台湾における新生活様式をも樹立できると指摘している。彼の竹への愛着は他の寄稿からも見られる。3 号の「亂彈」「點心」欄で金關は「金雞」の署名で本島式間食店の発想を述べたことがある。彼は店の内装について、竹テーブル、竹椅子、竹暖簾で組むことを提案している。氏の構想による台湾風生活は、本島人家庭や内地人家庭、レストランなどに

[5] 『民俗臺灣』19 号。

臺灣大學學術期刊資料庫

おいても竹製品を大いに利用するものであった。筆者は金關のこうした台湾にあった豊富な竹材料を庶民の家財道具に使うという合理的な発想に同感するものである。

木材でできた民藝品 は竹に続いて 3 位を占める。39 号の「鏡箱仔」の解説において金關は次のように述べている。

> 鏡箱仔は本島女性の嫁入道具の一つであつた。上の蓋には二箇所に蝶番があり、一は縁につき、一は蓋を中途で折る。蓋を上げると四十五度位の角度で、蓋の裏に仕込みになつてゐる鏡が箱の上に立つやうに出來てゐる。それから前板を引き上げて中に押し込むと、引出しが現はれる。これは勿論化粧道具を入れるのである。上掲の標本は廣東あたりの製品と思はれるが、本島で使用されてゐたものである。本島で普通に見るものには側壁がない。木材は相當堅いが雜木である。塗料が美しく、真鍮の金具が非常に面白く出來てゐる。全體の均齊も見事である。近頃或る必要から臺北市の家具商を一巡りしたが、現代の規格による鏡臺の製品の救ふべからざる愚劣さに愛想をつかしてしまつた。本標本の如きも、決して最高標準になるものとは云へないだらうが、以つて現代日本の生活造形文化を救濟する上に、反省の資料として充分役立つものと信ずる（長さ 262 ミリ、幅 192 ミリ、高さ 180 ミリ[6]。

ここで金關は本島女性の嫁入道具である「鏡箱仔」の材質や形、寸法などについて詳細に述べている。文中にもあったように、彼がこの鏡箱仔の生産先は中国の広東であると判断していた。

氏の思考様式では、文化は高いところから低いところへ流れ、民芸は文化を語るものであった[7]。一般の台湾本島人は日本内地の道具や小物を台湾現地のものより優れているという植民地民の劣等感をもっていた。しかし、金關はここで台北市内の家具屋に置いてあった家具の巧みさは、広東伝来の鏡箱仔に比肩できないものといい、

---

6　『民俗臺灣』39 号。
7　『臺灣公論』7 巻 10 号（通巻 82 号）、昭和 17 年 10 月号、P.7。

臺灣大學學術期刊資料庫

それを一つの反省資料として現代日本の造形文化を考え直すべきだと指摘している。これは漢民族の工芸品に鏡箱仔という素晴しい文化の結晶もあるので、台湾人は日本かぶれする必要がないという示唆的なものであったと見られる。

**（二）松山虔三と民藝解説・グラフ**

10 号 P.27「竹細工」の村についてグラフの構成は次のとおりである。三頁のグラフはいずれも関廟庄で撮った竹細工に関するものである。第一頁「關廟庄信用組合工房の製品とその女工」は紙面の上三分の二を占める。残りの三分の一は、右に「その製品」、左に「下地の山と竹皮を巻いたもの」がある。第二頁は六等分にして六枚の写真が見られる。右の三枚は上から順番に並べると、「同庄田中央に建築中の一民家」、「その細部」「松脚子部落の一民家」であり、左の三枚は「田中央のザル作り」「五甲部落の民家の入り口の竹の扉及びその家の製品の竹椅子」「松脚子部落の景觀」である。上述のグラフ説明のほかに、関廟庄事情ならびに、村において竹細工業の過去と現在、そして詳細に実生活に役立つ竹製品をも紹介されている。金關の竹細工についての説明は後述柳宗悦を関廟庄に案内した時の記載に譲る。

19 号「廣東歳末風景」は 16 枚からなる中国廣東省で映った歳末風景である。それぞれの文字説明は「桃の花売り」「桃の花を買って」「飾り物売り」「線香屋」「街の雑踏」「紙製の飾り物」「露店の床屋」。「街頭の結髪屋」「占ひもする、手紙の代書もする辻占い師」「口入屋」「施食を待つ難民」「客を待つ苦力」「質屋」「質屋の店先」「食事のすむを待つて残物を乞ふ女達」「乞食」「廣州四大酒家の一つ」「蛋民も船に新春の仕度をする」である。撮影の期日は記されていないが、19 号は昭和 18（1943）年 1 月に発行されたものであるので、前の年の 1942 年の旧正月に撮ったと考えられよう。このなかに第一枚と第二枚の桃に関する新年の風景について触れたい。

2005 年の旧正月の休暇を利用して、筆者は家族付き合いの友人同士といっしょに、「ベトナムとカンボジアめぐり」のツアーを組んだ。

臺灣大學學術期刊資料庫

ベトナムの首都ハノイ市内では、観光ホテルのホールはともかく、商店街や、民家などの門で、桃と金柑の鉢植えの飾りが目を引くものであった。それに、観光ホテルでは、丈２メートル以上、立派なものに対し、民家では、五十センチほどの小型のものに過ぎず、ここでは新年を祝うスケールは随分違うと感じた。また、街で桃の切り枝を売る行商が散在する。ガイドさんに聞いたら、それは新年の仕来りで、今年は不況のため、売れ残りが新年後にも何とか売れるように頑張っているということである。ベトナムは古くから中国と密接な交流が行われている。ベトナムの華僑の世界では、今になってもこの古い中国人の慣わしが存続していることを私の目で見たのである。

松山のグラフには、建物や、地域風景が多く見られる。台湾在来の建物は古い時代の伝統を代表するものに対し、台湾式と日本式とが混ざった有形物は総督府の政策に呼応したものとされる。38 号台湾の新しい住宅様式（写真五枚から構成する）はその代表であると思われる。文字説明は下記の通りである。

> 昭和十九年五月の衛生掃除施行日に台北市水道町の街上でスナップした。第一圖は煉瓦造、日本瓦。表に疊と、様式藤椅子、日本式の蒲團を干す、屋根瓦の葺き方が非常に拙劣で、瓦が波うってゐる。第二圖上、煉瓦造、切妻日本瓦屋根。窗廣く、日本式格子を入れてゐる。疊を干す。隣家との間に煉瓦造の手法より自然に生ずる防火壁の上端が見え、他方の切妻が日本式であるに拘らず、この部分の施行法は臺灣式である。第二圖下。煉瓦造、四注日本瓦葺。但し張出軒には臺灣瓦を葺き、なほ澤山の臺灣瓦を準備してゐる。第三圖上。これは第一圖の家の側面である。日本瓦で葺いてゐるが、切妻のことろの施行法は臺灣式である。第三圖下。これらの家を背面より見たところ。日本瓦と臺灣瓦、日本式切妻と臺灣式切妻との交錯である。以上の例は臺灣式建築と日本式建築及び臺灣式生活と日本式生活と

臺灣大學學術期刊資料庫

の過渡を現すものであらう（傍線筆者）[8]。

上述の内容は写真の覚書として書かれたと思われる。写真に映ったのはさり気なく散策中に捕った常民生活の無造作の一面である。「煉瓦造、日本瓦。表に疊と、洋式藤椅子、日本式の蒲團」そして「日本瓦と臺灣瓦、日本式切妻と臺灣式切妻との交錯」は、在来生活様式が持続したまま、新来生活様式の浸透による交錯現象の現れであろう。

グラフ写真の紙面を全体的に見ると、すべての写真は松山の作品である。が、前半は金關をはじめ、他人の文字説明が添えるのが多く、後半に移るにつれて、松山本人の文字説明が常となった。当時帝大人種学教室嘱託として勤めた松山は、公的にも、私的にも金關丈夫と仕事していた。後半において写真も文字説明も、松山一人で担当したことは彼の能力が認められたといってよかろう。

**（三）立石鐵臣と表紙・民俗圖繪**

立石鐵臣の『民俗臺灣』における有形物に関する寄稿は、表紙、民俗図絵及び文字による叙述がある。8 号の表紙には、立石のしなやかな女性用下駄の版画図、巻頭語には、丈夫そうな男性風下駄、そして P47 の「臺灣の下駄について」、このページの右上に線条滑らかな女性用下駄が添えられている。こうした図柄や文字から、8 号は「柴屐」を主として編集した嫌いがあり、この号は「柴屐特集」にした意図がうかがえる。

> 臺灣下駄と呼ばれてゐる柴屐をこの号の表紙に描いた。この履物の生ひ立ちは厨房である。……表紙の帆布柴屐は内地人の家庭の裏口にも進出してきている。同じやうな型のうちにも、中くぼみの無いもの、先が平たいもののなどと、いくらか工夫の変るものがいろいろあるが、柴屐のうちでも形が従順なものゆゑ、下駄より丈夫で、水に濡れるをおとはない柴屐の本分をこれが代表して認められ、招きいれられるのであらう……う

[8] 『民俗臺灣』38 号。

臺灣大學學術期刊資料庫

す暗い厨房に生まれた柴屐が、今は路地にも停仔脚にも店内にも賑やかで、その中には、ここのカットに描いたやうな媚態の濃い帆布柴屐が多いが、この現れは、女たちの足が纏足から開放されてからのことであらう。女たちが、未だ纏足の不自由に甘んじてゐた頃には、この厨房の履物は、查某嫻といふ足の自由な、しかし心は不自由な売られてきて厨房で働いた女たちのものだつたのだから……女たちの足が自由になるにつれて、柴屐にもいろいろどりか加へられ、厨房に背いて人なかに華やぐもものが出来たのであらう。ハイ・ヒール型に原色のエナメルを塗り、それへ文化式花模様を描き、帯にはリボンをつけたものなど、きれいさつぱりと厨房を見捨てて省みない履物であらう。柴屐を造る工房を見たが、斧一丁で臺を造る技は、無雑作で手早いものであつた。臺の木材は龍眼が多くつかはれてゐるらしい。價は安く、巻頭語の棕柴屐が六十五銭。ここのカットのハイ・ヒールが三十七錢である。表紙のものは忘れたが、やはり四十錢以下だつたと思ふ（傍線筆者）[9]。

柴屐は常民の暮らしに欠かせないものであった。しかし、纏足が女性美の印しであった時代において、纏足した足は柴屐を履くことは不可能である。纏足の資格のない下女、查某嫻たちは柴屐を履いて台所で無我夢中に働いた。立石が指摘した、足が自由で心が不自由であった女性は台湾女性の大部分を占める。そして纏足から開放されたすべての女性が柴屐を履けた時代になってから、柴屐に美的要素を付け加え、上流社会の女性は綺麗に加工した柴屐を履くようになった。「柴屐」ひとつで台湾女性の運命、宿命が伝わってくる描写であると思う。

昭和 17 年 9 月 13 日『民俗臺灣』主催第三回「民俗採訪の会」は、当時台北州海山郡鶯歌庄尖山埔の陶業聚落において行われた。当日の日程表は、午前中、工房見学を中心とする。昼は尖山国民学校で

9　『民俗臺灣』8 号。

臺灣大學學術期刊資料庫

昼食をとる。午後は、講演会を行い、「鶯歌庄の沿革」（田川承）と「陶器の話」（金關丈夫）である。その後、民俗座談会を開く。当日の出席者は計 44 人あった。（編集部）

一方、『民俗臺灣』14 号（８月号）に、立石執筆の図絵「鶯歌の製陶工房」が掲載されている。つまり、立石は「民俗採訪の会」が行われる前に、一度鶯歌の製陶工房を訪れたことがあった、ということになる。図絵に添える記載は次の通りである。

> 鶯歌街尖山埔は製窯の聚落である。のぼり窯が點在し、あまたの工房が見られる。燒物は鉢・甕・便器・土管・骨甕の類で、手作りの素朴な方法でつ作られてゐる。蹴轆轤で壺を作る老工人の手馴れた美事さも面白く、若い娘が土管を作るさまも興が深い。小娘の手が萬遍なくゆきわたる土管は憎くない。洋室の手焙に向きさうな骨甕は此頃丈が少し低くなつてゐる。圖はまづ手始めの、黏土を弓仔で切り取つてゐるところである。鶯歌の娘はなかなか働き者だと聞かされた[10]。

鶯歌尖山埔は約 200 年（1804 年から）の歴史を有した製陶の町である。「鶯歌製陶 200 年」のホームページは、それを清朝時代の萌芽期、日本時代の勢いよく発展期、戦後から 1990 年ころの飛躍期、そして二十一世紀に入った転換期と，区分している。日本領台後、台湾総督府は用品製造業を管理するため、1913（大正 2）年「產業組合規則」を施行し、1917（大正 6）年、「信用組合」を設立した、以来、鶯歌における製陶業が益々繁栄しつつあるのであった。1937（昭和 12）年、軍需として碗や缶の製造が盛んであり、また、民間衛生習慣を改善するため、白色の磁器便器と痰壷の生産が始まるようになった。1939（昭和 17）年、立石及び民俗採訪の会の人達が鶯歌を訪れた時、登録済みの工場は 25 軒で、男性職人 120 人、女性職人は 60 人という規模のものであった[11]。

現在、鶯歌尖山埔における製陶の種類は日用品、芸術、建築、工

10 『民俗臺灣』14 号。
11 「鶯歌製陶 200 年」のホームページ「鶯歌製陶歷史大事記」より。

臺灣大學學術期刊資料庫

業、衛生の領域に及ぶ。立派な「鶯歌陶瓷博物館」はレジャーを兼ねて教育の機能を果たす名所となっている。

**（四）文字を主とした有形物の描写**

顔水龍の工房図譜は 22 号竹細工、23 号角細工、24 号染房及び 27 号筆屋の工房からなるものである。いずれも常民の暮らしと密着した用品の製作現場を表現するものである。編集の様式から見ると、紙面の構成は立石鐵臣の「民俗圖繪」に倣って、いずれも二頁でおさまるものであって、上半部は挿絵で、下半部は文字説明となっている。挿絵の部は、職人の作業風景と作業道具が描かれるものである。文字説明は、当民藝品の歴史的由緒をはじめ、分布地域、作り方、種類、金額などからなる。

顔水龍の寄稿はこれのみで、それに、刊行期間は偶然に柳宗悦の訪台と重なるので、次のように推論したい。22 号は昭和 18 年 4 月号である。同年 3 月に、金關の同伴で柳宗悦は台南在住の顔水龍に出会った[12]。顔水龍は新婚四ヶ月の時だった。記載によれば、その後、台南州北門郡の佳里、学甲、北門、南鯤魚身、関廟をめぐったが、顔水龍が同行していたかどうか不明である。

顔水龍は太平洋戦争が発生後、物資が日に欠乏しつつあるため、総督府殖産局派遣で東南アジア及び中近東への視察を断念せざるおえなかった。そのかわりに、総督府より助成金をもらって台南州北門郡で「南亜工芸社」を設立し、「生協」のかたちで現地の人に暮らしの必要品の製作に指導するようになった[13]。このようなキャリアを有する顔水龍は、自宅のみ見学させることに止まることは考えられない。喜んで客に当たる柳宗悦を自分の仕事を見せたかったろう。要するに、工芸、民藝にこだわる二人の芸術家は大いに話が弾んだと確信できよう。しかし、総督府の要請で民藝品の視察のため、台湾に臨んだ柳宗悦と対面した時、自分の叶えなかった東南アジア、中近東視察の夢は如何に残念に思ったのではなかろうか。

---

12　『民俗臺灣』23 及び 24 号「臺灣の民藝に就いて」。
13　涂瑛娥『蘭嶼◎裝飾 顔水龍』台北　雄獅圖書、1993。P．70。

臺灣大學學術期刊資料庫

3 号 PP. 36～38 は宮山智淵の「菅芒藁を用ひて作る臺灣の乞日乞月物」である。もともこの寄稿は創刊号に載せられるものだが、後ろにつく池田敏雄の「有應公の靈驗」が検閲に通らなかったため削除された。結局、前の「菅芒藁を用ひて作る臺灣の乞日 乞月物」は池魚の殃に巻き添えられて三ページであるべきところを一ページだけ残したというありさまだった。完成版は 3 号で見られるようになった。創刊号に載せられるだけの重みが伺える。文の冒頭に、菅芒藁は水牛の飼料にあたり、立秋近く頃咲き、田舎の人は、それを箒にし、内地人はこの穂を生け花にするなど用途、風情などにつて述べられている。そのほかに、台湾北部では田舎の子供達の楽しい玩具の材料になるのだという。文の主体となる子供の玩具になるものは、鶏、重ね鶏、家鴨、馬、水牛、関刀、斧である。文字説明のほか、桑田喜好の図版が添えられている。

その後、子供の玩具に関連した寄稿は 27 号 P. 40 黄連發の「本島兒童の玩具」がある。黄の文では、草、木、土、石のすべてが台湾の子供の玩具に当てるものだという。彼は自然の恵みで作った玩具には、遊ぶ楽しさのみならず、その前に子供の手で加工し、或る特定の形に変化させることも一種の面白みであるという「三重の楽しみ」がある、と述べている。その上、お金がかからないことと、時間、場所に拘らないこと、せがむ相手は大人でなく、大きい子供にする（大きい子の誇らしさ）ことは子供同士の人間関係を築くことができる。また、いつでも得られるし、いつでも捨てられる。こうした材質は乾燥することによって形がくずれる林投の葉で作る玩具類、菅芒藁で作る玩具類、笹の雄鶏などは、遊び飽きる頃には既に駄目になっている、と大自然の恵みの良さ及び野趣に富む玩具のことを語っている。

彼は各種の材質及びそれに合った玩具の作り方を紹介している。ここでは、名称のみ掲げる。林投の葉で作る玩具類：蛇・鼓吹・帽子・馬・毬・飾品・風遨・冬娘仔
菅芒藁で作る玩具類：（3 号宮山智淵）

臺灣大學學術期刊資料庫

黄麻の本質部で作る玩具類：馬仔・阿不倒仔（達磨さん）・竹排・
竹の葉で作る玩具類：雄鶏　朱欒の果皮で作る玩具類：大車（昔風の二輪牛車）
粘土で作る玩具類：土人形　線香で作る玩具類：厄仔・輦轎（神輿）
マンゴーの種で作る玩具類：土鼈　稲藁で作る玩具類：厄仔（人形）
若竹で作る玩具類：鼓仔

これは台湾の北部及び南部の玩具を紹介する、という対照的な寄稿である。宮山智淵は二十年ほど前、自分の子供時代の経験であったのに対し、黄連發は刊行当時は 29 歳の青年であった[14]。いずれも子供時代の思い出であるが、宮山は、現在の子供は藁で玩具を作ることは出来なくなったと指摘し､黄は別にこの点に触れなかった。そもそも草や葉で出来た玩具は長持ちすることができず、また焼き物のように､今になっても民藝品として残されることも無理である。宮山と黄の記載がなおさら貴重な存在である。

## 四、柳宗悦と台湾の民藝

### （一）柳宗悦の台湾視察

『民俗臺灣』21 号（昭和 18 年 3 月）P．46 消息欄では、「柳宗悦氏　臺灣民藝視察のため昨年十二月來臺の予定のところ本月末に変更」という文化人の動きが掲載されている。柳宗悦の台湾視察は 1943 年の３月中旬から約一ヶ月間にわたり、訪台期間中、関係者との懇談・参観などで日程がハードだった[15]。視察中、台湾各地で収集した民藝品を 4 月中旬台北公会堂で民藝展覧会が開催された。文化界の反響は、昭和 18 年 5・6 月号（23・24 号）の『民俗臺灣』と同年 6 月号の『臺灣公論』において、それぞれ氏に関する報道が載せられている。『民俗臺灣』における「臺灣の民藝に就いて」（23・24 号）は、金關丈夫が記録した柳宗悦の台湾民藝紀行であるとみな

[14]　『民俗臺灣』38 号、金關丈夫「悼黄連發君」故人略歴より。
[15]　池田敏雄「柳宗悦と柳田国男の「不親切」－「民芸」と「民俗」をめぐって」『民芸手帖』、1980 年 1 月号、P．8～15。

臺灣大學學術期刊資料庫

してよかろう。覚書として「〇」を付けたところを下記のような条項が見られる。

23 号には、「林本源邸宅　林本源邸宅所藏執事牌の字　竹行李（台北市内所見）　菊元百貨店賣品牛角製煙草セット　穿瓦衫（板橋及び士林にて。穿瓦衫については本誌前月號民藝解說參照）　士林刀（士林の製作者の家數軒訪ねる）　淡水舊英國領事館邸宅　新竹市城隍廟　霧峰林獻堂氏邸にて　鹿港金盛巷　彰化市にて藍蒸（竹の蒸器)を注文する 彰化の民家の正廳にて神桌を見る　彰化孔子廟門前にて彰化市揚子卿邸　彰化市福和盛菓子舗にて　彰化市城隍廟にて　彰化市中にて竹製の籠を作る家あり　再び彰化市孔廟について　刺竹叢生する風景　南投にて 相思樹の老樹　斗六街梅里尚徳氏の揚琴を聴く（曲は百家春、天下樂、將軍令）再び藍蒸について斗六街梅里君の住ひぶりについて　車中にて　嘉義市施青江製作の楹籃　嘉義市中にて亞杉製の文呂を見る　同じく物賣りの屋台を見て　臺南産業舘陳列の顔水龍氏指導作品の三角藺のスリッパ　同所牛角製帯鈎　同所ジャワ製の竹の折鞄　同じく福州産竹籠　臺南市内骨董店にて清末頃の赤繪の皿を見て　安平港漁戸の門に干す薯榔染めの漁網を見て　同所竹筏を見て　同所妙善宮にて使用中の宗教版畫　同宮内の厨子　安平市街　臺南市役所助役室備品草花模様交趾燒植木鉢　臺南市臺町市場の擔麺　同市媽祖廟正門の壁の浮雕　同市大南門　同市孔子廟　同街の蒐藏家醫師林某氏歯科醫師黃某氏同市謝汝川氏藏木製椅子 臺南州新豐郡關廟にて　同所の市場にで仙草を食べる　同庄田中央部落盧氏の住宅　同所にて竹戸棚を見て同じく陶製の箸立て　同所にで染附食器を多數譲られて旅嚢頓に重くなる。同所にて竹の家を見て　同庄松脚子部落　同所民家の仕事場にて　同庄五甲部落の椅子の仕事を見て　關廟より歸途」がある。

24 号には「臺南市顔水龍宅にてタイ國の藤製の蹴毬を見る　同じく竹家具を見て　同市新樓醫院の煉瓦の踏石　刺竹の藪　長榮中学校の建物　同市開元寺　同市中にて　臺北市龍山寺に就いて　赤繪の小皿　臺灣の窯業について　店頭にて　竹工藝について　臺南

臺灣大學學術期刊資料庫

州北門郡佳里番子寮の民家　同郡學甲庄の新作の草鞋を見て　楊桃學甲庄慈濟宮の古錢窗　同郡草水の部落にて新建中の竹の家を見る　北門庄の林投帽　南鯤鯓の王爺廟　再び關廟庄にて（傍線筆者）高雄市商工館所蔵廣東系本島男子用布鞋　水牛角製印材　高雄州商工課主催の座談會にて　同じく席上にて　同じく　同じく　同じく席上にて某氏の持參した支那製煙管を見て　同じく席上にて　東港郡萬丹の或る民家を見て　同じく　同じく　同じく　刺竹について　滿州郡ライ社にて　本誌の民俗圖繪について　羅東郡寒溪のタイヤル族　宜蘭について　文教局長主催の座談會席上にて彰化市の藍蒸を示しつつ」がある。

『臺灣公論』のは、座談会の発言内容であった。出席者は、柳宗悦をはじめ、案内役を務めた金關丈夫と立石鐵臣、『民俗臺灣』の仲間である中村哲、総督府営繕課長である大倉三郎という顔ぶれだった。金關の司会により座談会が進行された。席上、柳は台湾民藝の視察の感想として三点述べた。それは、①日本に台湾のことをよく知らせること、②台湾にいる台湾に対して正しい理解を持っている人と協同的に仕事をすること、③その仕事を理想的ではなく、実際に台湾の将来に役立つ計画を立てて実行すること、などである。

一方、『民俗臺灣』24 号の巻頭語は彼の美に対する見方が記載されている。

> 美しさと云ふ結果が、どんな原因から生まれて来たかを見守る必要がある。作られた物を通し、それを形作る材料や、作る時の手法や、又招かれてゐる用途のことを思ひみる必要がある。更に又それを作る人達の生活や進行、又それを作らせる社会やその組織をまで訪ねてゆかねばならない。結果に驚きがあるから、原因には一段と深い不思議が潜むであらう。物の美しさを結果でのみ受け取る人は、本当に美を見つめてゐる人ではない。趣味家に浅い見方の人が多いのは、奥にひそむ事に近づかうとはしないからである。高砂族の織つた織物を、美しいと見る人は多い。併しそれを産んでくれた人々に驚きを感じる人が稀な

臺灣大學學術期刊資料庫

のは不思議である。彼等を未開人と輕蔑してゐる人は、その布の美しさを知つてゐる人とは思へない。ましてあんな原始人にどうしてこんな美しい布が織れるのかと考へる如きは僭越の至りである。さうして又、なぜこんな事が吾々に容易に出来ないのかと考へる如きも、うぬぼれから来るのである。吾々には出来にくく、彼等には出来る力が當然あるのだと、そこまで考へてくれる人が稀なのは淋しい。美しさの魅力は、現れた姿よりも、匿れてゐる力にこそ潜んでゐる。物に驚きがあるなら、それを産んでくれる人に、一段と驚きが感じられねばならない。物をのみ愛して、人に冷かなのは、真に物を愛してゐない證據ではないだろうか[16]。

ここで柳宗悦は高砂族の織物の美しさに感動を覚えた人が高砂族人にも関心を寄せ、即ち物の裏に潜んでいる人間味を大切にするように呼びかけている。同じく『民俗臺灣』23 号・24 号に、氏の台湾各地の民藝品をめぐっての談話を金關丈夫が記録した〈臺灣の民藝に就いて〉の寄稿がある。

柳宗悦が指摘したのは高砂族の民藝にせよ､本島人の民藝にせよ、いずれも人間の知恵の結晶であり、徒らに内地風を模倣することをやめて、先ず自分のつかっている物を異なる視点より見直してほしいということであった。文中には台湾民藝の素晴しさ及び如何にそれを利用するかの方法が提案されたが、氏の呼びかけはいかなる効果を発揮したかが問題である。

要するに､厳しい政治現実の下で､被支配者の台湾人の脳裏には、長年「母国」日本文化の優越性を叩き込まれてきた結果、自分の文化の価値がすべて否認されてしまった。この時点で、氏が台湾人の自我意識を蘇らせようとすることは到底無理に近い。氏の好意は強いて言えば政治文化の濁流において微々たる一清流であり、台湾人に好感を持たせたに過ぎなかった。

16 『民俗臺灣』24 号巻頭語。

臺灣大學學術期刊資料庫

### （二）柳宗悦の民藝論

柳宗悦の民藝論について日本民藝館のホームページで次のように掲げられている。１実用性　観賞するためにつくられたものではなく、なんらかの実用性を備えたものです。２複数性　民衆の要求に応えるために、数多くつくられたものです。３労働性　繰り返しの激しい労働によって得られる熟練した技術を伴うものです。４廉価性　誰もが買い求められるほどに値段が安いものです。５無銘性　特別な作家ではなく、無名の職人によってつくられたものです。６地方性　それぞれの地域の暮らしに根ざした独自の色や形など、地方色が豊かです。７伝統性　伝統という先人たちの技や知識の積み重ねによって守られています。８他力性　個人の力というより、風土や自然の恵み、そして伝統の力など、目に見えない大きな力によって支えられているものです。９分業性　数多く作るため、複数の人間による協同作業が必要です。上述の概念の下で日本民藝館が運営されていると思われよう。

柳宗悦の台湾視察について池田敏雄は『民芸手帖』1980 年 1 月号で次のように述べている。

> 柳　1943 年 3 月中旬　約一　月　、戦時下　台湾　訪　，　。柳　招　　総督府　文教局、　実現　尽力　　金関先生。　。　粗末　扱　　台湾在来　工芸品　見直、　中　用　美　　選　展示　　思　。　　機運生　　、資源　窮乏　敵潜水艦　出没　、内地　　日用雑貨　移入困難　　、島内。自給自足必要　　……民芸館　　、台湾山地　　系小数民族　　織物　　、　　金関先生寄贈　　。（傍線筆者）[17]。

日本民藝館（〒１５３東京都目黒区駒場４－３－３３）は 1936 年（昭和 11 年）10 月 24 日設立されて以来、日本や世界の人々の憩いの場

[17]　池田敏雄は『民芸手帖』1980 年 1 月号、PP. 8～9。

臺灣大學學術期刊資料庫

として親しまれている。当年金關丈夫の寄贈品は近年になっても特別展「先住民族への眼差し―北と南の工芸」に出展されたようである。当館のホームページの紹介は次のとおりである。

*平成 15 年 1 月 7 日(火)～3 月 23 日(日)*

平成特別展 先住民族への眼差し　―北と南の工芸―日本民藝館改修記念―会期／平成 15 年 1 月 7 日(火)～3 月 23 日(日概要改修記念の最後を飾る特別展。この展覧会では、日本列島の北方に住む先住民であるアイヌ民族と、南方の先住民である台湾先住民族（パイワン族・タイヤル族・プユマ族等）が生み出した工芸品（１９―２０世紀初）の数々を紹介し、当館の創立者で民藝美の発見者でもある柳宗悦によって見出された、精霊感あふれる独自の造形文化に光を当てます。

展示される主なアイヌ工芸品としては、衣裳（切伏樹皮布・切伏木綿衣・切伏草皮衣)・刀下げ帯・首飾り（アイヌ玉)・木彫（棒酒箸・小刀・煙草入れと煙草差し・盆・鉢・へら等)。また、台湾先住民の工芸品としては、染織品（衣裳・被い布・袴他）を中心に、首飾り・編みかご・木彫など当館所蔵の優品約１５０点です。

人と自然と神との深いつながりの中から生まれた彼らの伝統的な造形文化は、日本人（和人）や漢民族による強制的な生活の近代化や同化政策にもかかわらず、逞しく保持されてきました。その優れた造形感覚は、生活の道具であるこれら造形物の形や色や文様の中に現われ、見る者の心を強く引きつけてやみません。敬虔な祈りと原始の息吹きを感じさせる、美の始源体ともいえる民族固有の造形美をご堪能下さい（傍線筆者)。

1943（昭和 18）年 4 月、台湾の先住民族及び、漢民族の造形物が台北公会堂で展覧されている。それは政治的・経済的働きの結果であって柳宗悦がその催しの主役だった。2003（平成 15）年、日本の

臺灣大學學術期刊資料庫

都心地で、台湾・日本の少数民族の造形物がその光に照らされている。グローバル化しつつある現代社会において、稀有で、紛失の恐れがあるという考えの下で、その良さが一層美化される。その場で柳宗悦はいなかったが、そうした造形物から、氏の指摘する民藝品の「健康な美」「自然の美」「無心の美」が無言に伝えてくるのであろう。

## 五、終わりに

『民俗臺灣』の総号数は延べ四十三あった。これを雑誌の生命期間としてみれば、柳宗悦の訪台、そして視察旅行の記載である「臺灣民藝に就いて」が見られたのはちょうどその中間に当たることになる。創刊号から終刊号に至るまで、つまり横軸である数多くの台湾における民藝民具の紹介は、雑誌のハナだといわれる。したがって、22 号及び 23 号の「臺灣民藝に就いて」が雑誌の縦軸に咲いたもっとも美しいハナだと言いたい。

そもそも人間は暮らしに、必要な生活用品を、現地の素材を利用することはごく当たり前のことであり、かつ合理的である。しかし、被植民地民であった台湾人は日本の道具や小物を台湾現地のものより優れているという劣等感をもっていた。このような文明趣向は植民政策の一環でもあったようである。

しかし、輸送の不安定性が日に増す戦争期間に、物資の自給自足が厳しい現実となり、日ごろ無視或いは蔑視されている民芸民具にあった実用性、かつ美的感覚を見出すことが必要となった。これが柳宗悦の台湾視察の使命であった。『民俗臺灣』に掲載されている松山の写真や立石の図絵は煙滅される恐れのある民藝、民具の美を残そうとする意図であったと思われよう。柳宗悦と『民俗臺灣』の民藝民具との出会いは『民俗臺灣』における美しい演出であったと思う。

なお、台湾人を日本人化にする植民地政策の挙句、形式上では、台湾人は「日本人」として「皇國」のために献身したに見えた。が、

臺灣大學學術期刊資料庫

台湾現地の物資を素材にした有形物の使用上では、一部の日本人は「台湾」に同化させられたことは、台湾総督府の抑制できない風土に溶け込んだ常民の交流であろう。

**参考文献**

『民俗臺灣』全巻四十三号（1941 年 7 月～1945 年 1 月）。

『臺灣公論』1942 年 10 月号。

『臺灣公論』1943 年 6 月号。

池田敏雄（1980）「柳宗悦と柳田国男の「不親切」ー「民芸」と「民俗」をめぐって」『民芸手帖』1980 年 1 月号、P.8～15。

涂瑛娥（1993）『蘭嶼◎裝飾 顏水龍』台北 雄獅圖書。

黃光男（1998）『臺灣常民文物展 信仰與生活』台北 國立歷史博物館。

臺灣歷史博物館籌備處 http://home.educities.edu.tw/taiwanox/

財団法人 日本民芸館

http://www.mingeikan.or.jp/Pages/gaiyou.html

鶯歌陶瓷 200 年 http://www.ceramics.tpc.gov.tw/web/yingo200.htm

國立台灣工藝研究所

http://www.ceramics.tpc.gov.tw/web/yingo200/ceramictown/town.htm

臺灣大學學術期刊資料庫